

朝のこない夜はない

山首 鈴木正修



苦難くなんによって人間にんげんは成長せいちょうする

ご存ぞんじの方かたも多いと思おもいますが、アメリカのトランプ大統領だいとうりやうのメラニア夫人ふじんは3人目にんめの奥おくさんです。

次期じき大統領だいとうりやうに決きまっているバイデンさんさいでんもジル夫人ふじんとは再婚さいこんです。バイデンさんは30歳さいという若さわかで上院議員じやういんぎいんに当選とうせんしました。しかし、上院議員じやういんぎいん当選とうせんの直後ちやくごに最初さいしよの奥おくさんと娘さんむすめを交通事故こうつうじこで亡なくしています（現在の娘むすめさんはジル夫人ふじんとの間あいだに生まれうれたアシュリーさんです）。この時とき、息子さんむすこ2人も瀕死ひんしの重傷じゆうしやうを負おっています。バイデンさんは息子さんむすこ達の看病かんびやうを理由りゆうに議員職ぎいんしやくを辞退じたいしようとしませんが、周まわりの説得せつとくを受け議員ぎいんに留とどまります。そして、45歳さいの時ときにまた試練しれんが訪おとずれます。脳動脈瘤のうどうみやくりゅうの破は裂れつにより一時じ、危篤状態きとくじやうたいに陥おちったのです。この時ときは懸命けんめい



なりハビリによって7カ月で公務に復帰していますが、まだ試練は続くのです。よく次男のハンター・バイデンさんが話題になりますが、長男の話が出てきません。実は長男は亡くなっているのです。今から5年前、バイデンさんの長男はデラウェア州の司法長官をしていました。バイデンさんの後継として期待され、とても優秀な人でしたが、突然の脳腫瘍で亡くなってしまいました。バイデンさんの人生は大変な試練の連続ですが、大統領当選の暁には、どのようにしてこれらの苦難を乗り越えられたかをぜひ語っていただきたいと思います。

オーストリアの精神科医で、「ロゴセラピー」の創始者として世界的に有名なビクトール・フランクルは、ヒトラーが作ったこの世の地獄・アウシュビッツ強制収容所から生還した人です。収容所の中で多くの人を励まし、



助け、自らも生還し、残りの生涯を人の心を救うために
尽くした偉大な人物です。

アウシュビッツから解放されたフランクルを待ち受けていたのは、妻ティリーの死の知らせでした。彼女はアウシュビッツからベルゲン・ベルゼンに移され、そのガス室で殺されたのです。25歳という若さでした。また弟は、強制労働の末に鉦山で亡くなっていました。両親も亡くなり結局、フランクルは一人の妹を残して、家族全員を失ってしまったのです。

ウィーンに戻ったフランクルは、友人のもとを訪れ、泣きながら語ったそうです。

「こんなにたくさんの方がいっぺんに起こって、これ程の試練を受けるのには、何か意味があるはずだ。私には感じられるんだ。あたかも何か私が私を待っている。何か私が私に期待している。何か私が私から求めている。私は



何かのために運命づけられているとしか言いようがないんだ」

これはフランク自身に對する「ロゴセラピー」（人が自らの生の意味を見出すことを援助することでの心の病を癒す心理療法）であつたのです。後にフランクは言っています。

「絶望とは、もうすぐ新しい自分と新しい希望が生まれてくるといふ前兆である」

私はこの言葉を知つた時、フランクという人は眞の樂觀主義者だと感じました。

フランクの有名な言葉があります。フランクは相談者にいつも言っていたそうです。フランクが亡くなつた後も後妻のエリーさんが「主人がいつもこう言っていました」と言つて人を励ましたそうです。

「人間誰しも心にアウシュビッツ（苦惱）を持っている。



しかし、あなたが人生に絶望しても、人生はあなたに絶望はしていない。あなたを待っている誰かや何かがある限り、あなたは生き延びることができるし、自己実現できる」

フランクは、人間は誰しも苦しみを持っている。しかし、必ず生きている限りあなたの役目がこの世にあるはずだ。必ず人生（天）はあなたに役目を与えている。その役目を果たそうではないか。人生を意味あるもの、意義あるものにしようではないか」と言っているのです。

江戸時代に杉山和一という検校がいました。検校とは、盲人の最高官位で、鍼灸を行い、また箏曲の演奏などもしました。和一は、若き日、その不器用さゆえに鍼灸の師匠に破門されました。社会保障も何もない時代のこと、和一は絶望のどん底に落とされました。しか



し、和一はあきらめませんでした。どうしたら上手く鍼を刺せるかをひたすら考え続けました。そして、あきらめかけて、故郷へ帰る道すがら、天が手を差しのべたのです。和一が石につまづいて転んだ時です。痛みをこらえながら、よろよると起き上がろうとしたその瞬間、和一の手にたまたま触れたのが、道端に落ちていた藁しべと松葉だったのです。和一はひらめきました。

「そうか、藁しべのような筒の中に鍼（松葉）を通せば上手く刺せる」

和一は試行錯誤し、後に世界的に普及し、今日でも受け継がれている「管鍼法」を開発したのです。

その後、和一は当時の将軍・徳川綱吉のお抱え鍼灸師になり、杉山検校と呼ばれるまでになりました。それだけではありません。盲人のための鍼灸学校を創ったのです。目の不自由な多くの人がこれによって救われました。



1680年頃のことです。ヨーロッパで最初に視覚障がい者の教育施設ができたのはフランスですが、それよりも百年も早かったのです。

杉山和一も一度は人生に絶望しかけたと思います。しかし、人生は、天は、彼に絶望していなかったのです。

先日、ある講演会に参加してきました。講師は曹洞宗師家会会長の青山俊董法尼です。本当は春に行われる予定でしたが、青山法尼がご病氣になり延期になっていました。一時間四十分の公演でしたが、あつという間でした。その中で大変印象に残ったお話を紹介します。

阿含経の中に、この世の中には四種類の人がいると説かれています。闇から闇へ行く人、闇から光へ行く人、光から闇へ行く人、光から光へ行く人です。お釈迦さまは人生の幸、不幸を光と闇という言葉に置きかえられた



のです。講演では「闇から光へ行く人」のお話でした。

青山法尼が京都に講演に行かれた時に乗ったタクシーの運転手さんが「ご出家さんですね。私の話を聞いていただいてもよろしいですか」と言われたそうです。青山法尼が「どうぞ」と促されると、運転手さんは自らの生い立ちを語りました。

「実は私が高校3年生の時に両親が突然、一緒に亡くなったのです。町内会でフグを食べに行った次の日の朝、いつもなら弁当を作ってくれている母が、いつまでたっても起きてこない。おかしいと思って両親の部屋を見に行くと二人ともフグの毒で死んでいたのです。

その部屋はフグの毒でさんざん苦しんだ跡がありました。すぐに親戚が駆けつけてくれて、葬式は出してくれなければ、面倒は見てもらえません。借金こそ無かったけれど、貯金は全くありませんでした。私に残



されたのは13歳年下の5歳の妹だけでした。高校3年生
と5歳では家賃が取れないということで家主さんに家を
追い出されてしまいました。私は5歳の妹と本当に身の
回りの物だけを持って、六畳一間の安アパートに入りま
した。そこから、私は両親に代わって妹を育てるために
無我夢中で働きました。朝は新聞配達、昼間は勤め、夜
はアルバイトと必死に働いて、22、23歳の時には、安い
アパートを買う程のお金ができました。

その間、私は働くことしか考えませんでしたから、洗
濯も炊事も掃除も何もしませんでした。妹が全部やって
くれました。以前『おしん』というNHKのドラマがあ
りました。私の妹もおしんのように働いたのです。妹に
勉強机を買ってやりたかったけれど、六畳一間では食卓
と勉強机の二つは置けませんからね。だから妹は食卓を
勉強机にして勉強したのです。狭い家で育ったから妹は



整理の名人になりました。今は大きなお家にご縁をいた
だいて、いつもきれいに整理整頓をしております。考え
てみましたら私なんかは、もし両親が元気で生きていて
くれたら今頃、暴走族か何かになつてろくな人間にはな
つていなかったと思います。もし両親が一緒に死んでも
お金を残していてくれたら、今の私はなかったと思いま
す。幼い妹がいなかったら、寂しくてグレていたと思ひ
ます。両親がいらない、お金がない、幼い妹がいる。それ
で私は本気にならざるを得ませんでした。私を本気にし
てくれ、一人前の大人にしてくれ、男にしてくれたのは、
両親が一緒に死んでくれたお陰、お金を残してくれなか
ったお陰、家主が追い出してくれたお陰、幼い妹を付け
てくれたお陰と今は感謝しております。お陰で本気にな
れました。男になれました。大人になれました。毎日、
感謝の線香を両親の位牌にあげております。何も言うこ



とはありません。けれども、妹が良い縁をいただいて、花嫁衣裳を着た時だけは泣けました。両親に見せたかった。私は今、一つだけ願いがあります。自分の子どもが一人前になるまでは命をいただきます」

このような話を青山法尼は聞かれ、「どんなお方の話よりもすばらしい話をありがとうございます」と言つてタクシーを降りられたそうです。

青山法尼が言われていました。

「普通に考えたら闇としか思えないことを、お陰で一人前になれました。本気になれました。男になれましたと全部プラスに切り替える。まさに闇から光へというお手本です」

人生は苦悩を乗り越え、悲しみを乗り越えて行くところに真の幸福、また悟りというものがあるのです。



日蓮聖人は「道心は病によりておこり候」と仰っています。如來壽量品には「常懷悲感 心遂醒悟」（常に悲感を懷いて心遂に醒悟す）とあります。苦しみ悲しみによって人間は磨かれていくのです。

今回このようなお話をしようと思っただけは、私が毎月購読している『致知』という雑誌に、「苦難にまさる教師なし」という特集があったからです。編集長の総リードの中の言葉を紹介します。

まず、昭和天皇・皇后両陛下に仏教を講義した鈴木大拙の言葉です。

「人生はどう論じようとも、結局苦しい闘争である。だが、苦しめば苦しむ程、あなたの人格は深くなり、そして、人格の深まりとともに、あなたはより深く人生の秘密を読み取るようになる」



続いて、イギリスの名宰相、ディズレーリの言葉です。
「いかなる教育も、逆境から学べるものには敵わない」

次は終戦の詔勅の起草にかかわった安岡正篤氏の言葉です。

「人間は苦悩によって練られていくのでありまして、肉体的にも精神的にも人間が成長していくために苦悩は欠くことのできない条件であります」

さらに「全一学」を提唱した教育者、森信三氏の言葉です。

「逆境は神の恩寵的支援なり」

最後は京都大学第16代総長、平澤興氏の言葉です。
「成長するということは苦難が喜びであると思えるよう



になることです。苦難を越える、それが喜びです」

現在、コロナ禍で日本だけではなく、世界中の人々が苦難に遭っています。しかし、これを取り越えた先には光明にあふれた世界が待っているのではないかと思えます。14世紀、ヨーロッパではペストが流行り、ヨーロッパの人口の3分の1が亡くなりました。しかし、その後にはルネサンス（再生）が起こりました。今回のコロナが去った後にも、新たな素晴らしい世界がある」と信じて生きてゆきたいものです。

